

テキスト言語学の可能性

—グリム童話のテキスト言語学的分析—

黒 沢 宏 和

0. 序

テキスト言語学 (Textlinguistik) は、従来の言語学とは異なり、文 (Satz) よりもさらに一段上位に位置するテキスト (Text) を分析の対象とする。つまり、テキスト言語学とは一文以上のまとまりのある文章を分析する研究分野である、と言える。

このテキスト言語学に関して、一方では「テキスト」そのものの定義も研究者によって異なり、その分析方法も多種多様で、統一的な見解はまだ存在しないのが現状である。

他方、テキスト言語学と言えば、書かれたテキストのみを扱うと思われがちだが、語用論 (Pragmatik) の発展に伴い、テキストのコミュニケーション的な側面も研究の対象とすることができる⁽¹⁾。言い換えれば、文語 (geschriebene Sprache) のみならず、口語 (gesprochene Sprache) も、その分析の対象とすることができるのが、テキスト言語学の利点である。

要するに、文語であれ、口語であれ、これから分析する「テキスト」の定義をしっかりと行った上で、そのテキストにあった既存の方法論を用いて分析すれば、一定の学術的な結論を導くことが可能だという点で、テク

(1) Vgl. Bußmann (2008), S. 724.

スト言語学は守備範囲が広く、実用性の極めて高い学問分野と言える。

このようなテキスト言語学を、言語学以外の分野に応用し、火急の社会的問題を解決したり、あるいは文化的に実践したりする動向が近年見られる。

1. 先行研究

ここで、テキスト言語学を言語学以外に応用した事例を概観する。

1.1 Thim-Mabrey/Greule (2007)

2006年9月12日ローマ教皇ベネディクト16世(当時)は、レーゲンスブルク大学の大講堂で、「信仰、理性、大学——回顧と考察」⁽²⁾と題して講義(講演)を行った。そしてこの講義の一部がイスラーム教徒、並びにイスラーム社会に反感を招くことになった。

レーゲンスブルク大学は、この出来事に対して各学部の代表者たちがそれぞれの専門の立場から論文を執筆し、それらを一冊の本にまとめ上梓した⁽³⁾。哲学部IV(言語学及び文学)からは二編の論文、すなわち一般言語学のブレイクレ教授⁽⁴⁾と、ドイツ語学のティム-マーブレイ教授/グロイレ教授によるものが提出された。

ティム-マーブレイ教授/グロイレ教授は、「引用—理解—誤解『レーゲンスブルク講義』に関する言語学的な解説」⁽⁵⁾と題した論文を、二人の教授

(2) 原題は Glaube, Vernunft und Universität. Erinnerungen und Reflexionen. 講義の内容は、例えば Benedikt XVI. (2006), S. 11-32 や Dohmen (2007), S. 15-26に収録されている。

(3) Vgl. Dohmen (2007).

(4) Vgl. Brekle (2007).

(5) Vgl. Thim-Mabrey/Greule (2007).

の見解としてではなく、ドイツ語学講座の総意として、さらに詳しく言えば、2006年度冬学期ドイツ語学講座提供の「博士論文執筆者のためのコロキウム」(Doktorandenkolloquium)に参加していた世界各国からなるゼミ参加者の総意を、ドイツ語学講座の意見として発表した。言わば、ドイツ語学講座として総力を挙げてこの問題に取り組んだ結果を論文にまとめたものが Thim-Mabrey/Greule (2007) である。

この論文では、教皇による講演に関して、これが本当に「講義」と言えるのかどうかという問題を、テキスト言語学的観点、特にテキスト種類(Textsorte)という観点から考察し、教皇による講演が本来の意味での「講義」とは言い難い、という結論を導こうとする。

他方、「講義」と並んで各種メディアによって用いられている表現のヴァリエーション、たとえば、記念講演(Festvortrag)、招待講演(Gastvortrag)、講演(Rede)、教皇の講演(Papst-Rede)、スピーチ(Ansprache)等である。これらの表現の揺れから、教皇による講演テキストを一概にテキスト種類「講義」へと分類することは困難である、と結論付けた⁽⁶⁾。

筆者は、当時、上記のコロキウムに参加し、この論文の成立過程を間近で見ているので、その主張にも納得できる。しかしながら、言語学とは無縁の、イスラーム教徒や一般市民がこの論文をどう評価するについては、議論の余地があろう。

いずれにせよ、イスラーム社会からの激しい批判に対し、ドイツ語学講座の英知を結集して、テキスト言語学的観点からアプローチしたという点で、この論文は高く評価されるべきであろう。

(6) Thim-Mabrey/Greule (2007), S. 167.

1.2 黒沢 (2009)⁽⁷⁾

筆者は、Thim-Mabrey/Greule (2007) を補完すべく、コミュニケーション的な側面からアプローチした。コミュニケーションの機能を持つ完全なテキストが成立する為の条件として、以下の七つの基準が挙げられる：

1. 結束構造 (Kohäsion)
2. 結束性 (Kohärenz)
3. 意図性 (Intentionalität)
4. 容認可能性 (Akzeptabilität)
5. 情報性 (Informativität)
6. 場面性 (Situationalität)
7. テキスト間相互関連性 (Intertextualität)

「レーゲンスブルク講義」では七つの基準のうち、明らかに二つの基準、つまり第三の意図性と第四の容認可能性を満たすことができず、テキストとして成立し得ない。従って、テキスト生産者（教皇）と受容者（主としてイスラーム教徒）間のコミュニケーションが成立せず、誤解を招くに至った。

1.3 Hausendorf/Thim-Mabrey (2009)⁽⁸⁾

この著作を筆者は2012年の夏、レーゲンスブルク大学を訪問した折、編著者の一人である Thim-Mabrey 教授より頂戴した。タイトルを日本語に訳せば『書くきっかけとしての芸術作品—ドイツ・チェコへの旅：「ガラ

(7) 黒沢 (2009), S. 45 ff.

(8) Hausendorf/Thim-Mabrey (2009).

スの箱舟」を映し出す鏡であるゲストブッカー』となる。本の表紙の中央部分には「ガラスの箱舟」というオブジェが載せられており、最初は芸術か、はたまた宗教に関する本かとさえ思われた。

2003年～2005年にかけてバイエルンの森国立公園のドイツとチェコの国境付近に芸術作品「ガラスの箱舟」(Glasarche)が設置された。ここを訪れる観光客の為にゲストブック(Besucherbücher)が用意されたそうであるが、このゲストブックをテキスト言語学を含め、芸術的、文化的観点から論じたのが本書である。

本書には16編の論考が収められており、そのうち7編がテキスト言語学的分析、とりわけテキスト種類(Textsorte)を用いた分析を試みている。ゲストブックを分析の対象にするとは、思いも寄らぬ斬新なアイデアである。テキスト言語学をごく身近な、未知の領域へ応用した先駆的な例として、高く評価されるべきであろう。

2. 問題提起

予てより筆者は、テキスト言語学を言語学以外の他の分野へ応用する方法を模索してきた。最終的には、テキスト言語学を机上の学問からより実用性の高い分析方法へ高めることが目標である。

とは言え、現段階ではテキスト言語学を利用して上記のThim-Mabrey/Greule(2007)のような火急の社会問題を発見し、それに対処するのは困難である。

他方、Hausendorf/Thim-Mabrey(2009)のように、言わば文化的・芸術的な未知の領域を開拓することも難しい。

そうすると、現段階で一番確実なテキスト言語学の応用法とは、社会的・文化的な方面ではなく、教育的、つまりドイツ語教育にその成果を応用す

るのが得策と言えるのではなからうか。この分野での応用例はまだ緒に
いたばかりである⁽⁹⁾。

3. 本稿の目的

そこで本稿では、テキスト言語学をドイツ語教育の分野に応用すること
を目的とする。この際問題となるのは、どんなテキストを分析するのか、
ということである。

筆者は教鞭を執るようになってから20年になるが、常日頃から初級から
中級への橋渡しをするような教材、具体的に言えば2年生用の教材を選ぶ
のはかなり困難であると感じている。これは、一方ではドイツ語教科書出
版業界では、初級用は毎年数多くの教科書が出版されるのに対し、中級用
の教材はごく僅かしか出版されないことに起因している。

他方、どんな教材を用いるのかというのも難しいテーマである。2年生
用であるからには、会話ばかりではなく、少し内容のある、含蓄のあるテ
キストを読ませたいと思うのは、教師の常である。しかしながら、含蓄の
ある文章は、一般に文の構造が複雑で、分かりにくいものが多い。学生に
とっても、分かりやすい文章を多読した方が、難解な文章を解読するより
も読解力を養成する上で、より効果的である。

では、分かりやすい文章とそうでない文章、言い換えれば易しい文章と
難しい文章の違いは何か。この違いを明らかにできはしないか。

そんな矢先、学生にとっても教師にとっても有益な教科書に出会った。

(9) 乙政(2005)を参照のこと。乙政氏は、日本語のテキストをドイツ語で表現
する際に、テキスト言語学の理論がどう役に立つのかを、豊富な実践例と共に
示している。

『グリム童話で学ぶドイツ語 Part II』⁽¹⁰⁾である。この教科書の「はじめに」には、以下のような記述が見られる：

初級文法を終えた学生が無理なく取り組めるよう、『グリム童話集』200話の中から4話を書き改めました。第1話「ブレーメンの音楽隊」は現在形で書かれ、第2話の「盗賊の花婿」の途中から現在完了⁽¹¹⁾が出てきます。

つまり、この書き改められたテキスト（以下、教科書版と表記）はオリジナルに比べれば、「分かりやすい」「易しい」と言える。従って、オリジナルと教科書版を丹念に比較すれば、「分かりやすい」と「難しい」の間に存在する相違を、目に見える形で捉えることができるのではないか。

そこで本稿では、第1話「ブレーメンの音楽隊」(*Die Bremer Stadtmusikanten*)及び第2話の「盗賊の花婿」(*Der Räuberbräutigam*)を考察の対象とし、オリジナルと教科書版を検討し、その違いをテキスト言語学的観点から明らかにすることを目的とする。これにより、「分かりやすい」テキストの特徴がより明確となり、ドイツ語教育の現場で教材を選定したり、あるいは執筆する際に活かすことが期待される。

さらに、個人的な経験から言えば、博士論文をドイツ語で執筆する際に、明晰で分かりやすい文章を書く必要性を痛感した。分かりやすいテキスト

(10) Wundt/本橋 (2007)。この教科書を、2008年度から2011年度までの間、かつての非常勤先である沖縄県立芸術大学で使用した。対象とした学生は芸術学専攻の2年生で、1年間、週2コマの授業を通じてドイツ語を学んでいることが履修条件である。この教科書は、毎年好評であった。私見では、これ位の難易度が2年生のクラスに相応しいと思われる。

(11) 時制に関して、オリジナルでは主として過去形が用いられている。本稿では、時制の相違に関しては言及しない。

とは何かを知ることは、ドイツ語で自分の意見を表明する際にも有益であろう。

4. オリジナルと教科書版との比較

本稿では、オリジナルと教科書版という2種類のテキストと、同じく2種類の童話を考察の対象とする。これらすべてのテキストを引用することは紙幅の関係上、到底できない。そこで2種類のテキストが、形態論的に大きく異なる個所を、統語論的観点から分類した上で、すべて列挙する。両者の対比を明らかにする為に、左側にオリジナル⁽¹²⁾、右側に教科書版⁽¹³⁾のテキストをそれぞれ引用する。括弧内は典拠を示す(ページ数と行数)。尚、強調は筆者による。

4.1 ブレーメンの音楽隊

まずは「ブレーメンの音楽隊」からの引用である。

4.1.1 関係文 (Relativsatz) (9例)

- (1) Es hatte ein Mann einen Esel, Ein Esel dient einem Mann
der schon lange Jahre die viele Jahre treu und redlich.
Säcke unverdrossen zur Mühle Er wird schließlich alt und
getragen hatte, *dessen* schwach ... (S. 2, Z. 1 f.)
Kräfte aber nun zu Ende gin-
gen, ... (S. 161, Z. 2 f.)

(12) 本稿ではオリジナルのテキストとして Rölleke (2003) を用いる。

(13) 教科書版のテキストとして Wundt/本橋 (2007) を用いる。

- | | | |
|-----|---|--|
| (2) | der jappte wie einer, der sich müde gelaufen hat. (S. 161, Z. 9 f.) | Der schnappt nach Luft und keucht. (S. 2, Z. 6) |
| (3) | weil unserer lieben Frauen Tag ist, wo sie dem Christkindlein die Hemdchen gewaschen hat und sie trocknen will; (S. 162, Z. 5 ff.) | (当該の表現なし) |
| (4) | in einen Wald, wo sie übernachten wollten. (S. 162, Z. 20 f.) | in einen Wald. Dort wollen sie übernachten. (S. 10, Z. 1 f.) |
| (5) | der Hahn aber flog bis in die Spitze, wo es am sichersten für ihn war. (S. 162, Z. 23 f.) | Der Hahn fliegt auf den Gipfel eines Baumes. (S. 10, Z. 3) |
| (6) | nach der Gegend, wo das Licht war, ... (S. 162, Z. 32 f.) | Sie gehen auf das Licht zu, ... (S. 10, Z. 7) |
| (7) | aber der Hund, der da lag, sprang auf und biss ihn ins Bein, ... (S. 164, Z. 5 f.) | Da ist aber der Hund, und der beißt ihn ins Bein. (S. 18, Z. 3 f.) |

- (8) der Hahn aber, **der** vom Lärmen aus dem Schlaf geweckt und munter geworden war, ... (S. 164, Z. 8 ff.)
- Der Hahn wacht von dem Lärm auf und schreit laut: (S. 18, Z. 5 f.)
- (9) Und **der** das zuletzt erzählt hat, **dem** ist der Mund noch warm. (S. 164, Z. 23 f.)
- Dem Erzähler dieser Geschichte ist immer noch der Mund warm. (S. 19, Z. 7)

4.1.2 *dass* 文 (*dass*-Satz) (7例)

本稿では、従属接続詞 *dass* によって導かれ、尚且つ主文の目的語となるような副文を総称して *dass* 文と呼ぶ。

- (10) so **dass** er zur Arbeit immer untauglicher ward. (S. 161, Z. 3 f.)
- und (er) kann nicht mehr so gut arbeiten. (S. 2, Z. 2 f.)
- (11) aber der Esel merkte, **dass** kein guter Wind wehte, lief fort und machte sich auf den Weg nach Bremen: (S. 161, Z. 5 ff.)
- Es weht kein guter Wind, denkt der Esel und macht sich auf den Weg nach Bremen. (S. 2, Z. 3 ff.)
- (12) **dass** die Scheiben klirrten. (S. 163, Z. 15 f.)
- Die Scheiben fallen klirrend nieder. (S. 11, Z. 11)

- (13) **dass** kein Licht mehr im Haus brannte, ... (S. 163, Z. 30 f.) ... ist das Haus ganz still und die Räuber sehen kein Licht mehr. (S. 15, Z. 2 f.)
- (14) **dass** es Feuer fangen sollte. (S. 164, Z. 2) Er hält sie nämlich für glühende Kohlen. (S. 15, Z. 7)
- (15) Da machte ich, **dass** ich fort-kam. (S. 164, Z. 19 f.) Da mache ich mich davon. (S. 19, Z. 4)
- (16) **dass** sie nicht wieder heraus wollten. (S. 164, Z. 22) Die Räuber ... getrauen sich nicht mehr zum Haus. (S. 19, Z. 5)

4.1.3 時称文 (Temporalsatz) (7例)

- (17) **Als** er ein Weilchen fortgegan-gen war, ... (S. 161, Z. 8) Unterwegs ... (S. 2, Z. 5)
- (18) **Ehe** er einschlief, ... (S. 162, Z. 24 f.) (当該の表現なし)
- (19) **bis** sie vor ein hell erleuchtetes Räuberhaus kamen. (S. 162, Z. 34 f.) es wird immer größer und schließlich kommen sie zu einem hell erleuchteten Räuberhaus. (S. 10, Z. 7-S. 11, Z. 1 f.)

- (27) aber **weil** morgen zum Sonntag Gäste kommen, ... (S. 162, Z. 7 f.) „Morgen kommen Gäste“, sagt der Hahn, ... (S. 7, Z. 3)
- (28) und **weil** sie müde waren von ihrem langen Weg, ... (S. 163, Z. 28 f.) Sie sind sehr müde von der langen Wanderschaft ... (S. 14, Z. 7-S. 15, Z. 1)
- (29) und **weil** er die glühenden, feurigen Augen der Katze für lebendige Kohlen ansah, ... (S. 163, Z. 35 - S.164, Z. 1) Der Abgeschickte ... will ein Schwefelhölzchen an den feurig leuchtenden Augen der Katze anzünden. (S. 15, Z. 5 ff.)

4.1.5 条件文 (Konditionalsatz) (2例)

- (30) „**wenn** 's einem an den Kragen geht,“ antwortete die Katze, ... (S. 161, Z. 24 f.) „Ich kann nicht lustig sein, denn mir geht es an den Kragen“, antwortet die Katze, ... (S. 6, Z. 3 f.)
- (31) und **wenn** wir zusammen musizieren, ... (S. 162, Z. 15) „Du hast eine gute Stimme und kannst auch Stadtmusikant werden!“ , ... (S. 7, Z. 6 f.)

4.1.6 比較文 (Komparativsatz) (2例)

- ③② *solang* ich noch kann. (S. 162, Z. 12) so lang wie möglich. (S. 7, Z. 5)
- ③③ und aßen, *als wenn* sie vier Wochen hungern sollten. (S. 163, Z. 21 f.) ... setzen sich an den Tisch und essen mit riesigem Appetit. (S. 14, Z. 3 f.)

4.1.7 間接話法 (indirekte Rede) vs. 直接話法 (direkte Rede) (5例)

- ③④ dort, meinte er, könnte er ja Stadtmusikant werden. (S. 161, Z. 7 f.) Dort will ich Stadtmusikant werden. (S. 2, Z. 5)
- ③⑤ ... und hat der Köchin gesagt, sie wollte mich morgen in der Suppe essen, ... (S. 162, Z. 9 f.) „die Hausfrau hat kein Erbarmen und ich komme morgen in die Suppe.“ (S. 7, Z. 4 f.)
- ③⑥ da *däuchte* ihn, er sähe in der Ferne ein Fünkchen brennen, ... (S. 162, Z. 26 f.) ... und (er) bemerkt in der Ferne ein Fünkchen brennen. (S. 10, Z. 4 f.)
- ③⑦ und rief seinen Gesellen zu, es müsste nicht gar weit ein Haus sein, ... (S. 162, Z. 27 f.) Seinen Genossen ruft er zu: „Gar nicht weit ist ein Haus.“ (S. 10, Z. 5 f.)

- ③⑧ Die Räuber ... meinten nicht Sie meinen, ein Gespenst be-
anders, als ein Gespenst käme droht sie. (S. 14, Z. 1 f.)
herein, ... (S. 163, Z. 16 ff.)

4.1.8 zu 不定詞 (Infinitiv mit zu) (3 例)

- ③⑨ Da **dachte** der Herr daran, ihn Da will ihn der Mann aus dem
aus dem Futter **zu** schaffen, Futter schaffen. (S. 2, Z. 3)
... (S. 161, Z. 4 f.)

- ④⑩ **um** die Räuber hinaus **zu** jagen Die Tiere wollen nun die
... (S. 163, Z. 6 f.) Räuber vertreiben ... (S. 11,
Z. 5 f.)

- ④⑪ ... **fingen** sie auf ein Zeichen Dann fangen sie mit ihrer
insgesamt **an**, ihre Musik **zu** Musik an: (S. 11, Z. 9)
machen: (S. 163, Z. 12 f.)

4.1.9 呼びかけ (Anrede) (4 例)

- ④⑫ Packan (S. 161, Z. 12) (当該の表現なし)

- ④⑬ alter Bartputzer (S. 161, Z. 23 (当該の表現なし)
f.)

- ④⑭ du Rotkopf (S. 162, Z. 12) (当該の表現なし)

- ④⑮ Grauschimmel (S. 163, Z. 1) (当該の表現なし)

4.2 盗賊の花婿

続いて「盗賊の花婿」からの引用である。

4.2.1 時称文 (Temporalsatz) (8例)

- (46) **als** sie herangewachsen war, Sie wird erwachsen . . . (S. 22,
... (S. 219, Z. 8) Z. 1)
- (47) **sooft** sie ihn ansah oder an ihn Beim Anblick seiner Gestalt
dachte, . . . (S. 219, Z. 16) bekommt es sogar Angst. (S.
22, Z. 6 f.)
- (48) **Als** der Sonntag kam und das Am Sonntag ist dem Mädchen
Mädchen sich auf den Weg angst und bange, . . . (S. 26, Z.
machen sollte, . . . (S. 219, Z. 26 1)
f.)
- (49) **bis** es mitten in den Wald Das Mädchen . . . erreicht end-
kam, . . . (S. 220, Z. 2) lich das Haus mitten im Wald.
(S. 26, Z. 5 f.)
- (50) und **als** er sich nicht gleich Er lässt sich nicht abziehen.
abziehen ließ, . . . (S. 221, Z. 10 (S. 35, Z. 1)
f.)
- (51) **Als** die Braut das hörte, . . . (当該の表現なし)
(S. 221, Z. 23)

- 52) **bis** sie morgens in der Mühle ankamen. (S. 221, Z. 32 f.) Am nächsten Morgen erreichen sie die Mühle des Vaters. (S. 39, Z. 3)
- 53) **Wie** sie bei Tische saßen, ... (S. 222, Z. 1 f.) Nun sitzen alle Gäste am Tisch ... (S. 39, Z. 6 f.)
- 4.2.2 関係文 (Relativsatz) (7例)
- 54) ... in den Wald kam, **wo** er am dunkelsten war, ... (S. 220, Z. 2 f.) (当該の表現なし)
- 55) Das Mädchen blickte auf und sah, dass die Stimme von einem Vogel kam, **der** da in einem Bauer an der Wand hing. (S. 220, Z. 9 f.) Das Mädchen ... merkt, die Stimme kommt von einem Vogel aus einem Käfig an der Wand. (S. 27, Z. 4 f.)
- 56) du wärst eine Braut, **die** bald Hochzeit macht, ... (S. 220, Z. 21 f.) Du meinst, du machst bald Hochzeit, ... (S. 30, Z. 3 f.)
- 57) hinter ein großes Fass, **wo** man es nicht sehen konnte. (S. 220, Z. 29 f.) Das Mädchen versteckt sich hinter einem großen Fass. (S. 31, Z. 2)

- (58) die Schlafenden . . . , **die** da reihenweise auf der Erde lagen, . . . (S. 221, Z. 24 f.) sie muss über die Schlafenden wegschreiten. Die liegen reihenweise auf der Erde. (S. 38, Z. 4 f.)
- (59) Als der Tag kam, **wo** die Hochzeit sollte gehalten werden, . . . (S. 221, Z. 35 f.) Dann kommt der Hochzeitstag. (S. 39, Z. 5)
- (60) Der Räuber, **der** bei der Erzählung ganz kreideweiß geworden war, . . . (S. 222, Z. 36-S. 223, Z. 1) Der Räuberbräutigam erblasst vor Angst, . . . (S. 43, Z. 9)

4.2.3 **dass** 文 (**dass-Satz**) (4 例)

- (61) Das Mädchen blickte auf und sah, **dass** die Stimme von einem Vogel kam, . . . (S. 220, Z. 9 f.) Da hört das Mädchen eine Stimme: (S. 27, Z. 1)
- (62) **dass** sie (die Räuber) sich bald in den Keller hinlegten, schliefen und schnarchten. (S. 221, Z. 21 f.) Sie legen sich deshalb bald hin, schlafen und schnarchen ganz laut. (S. 38, Z. 2 f.)

- (63) Aber Gott half ihr, **dass** sie Mit Gottes Hilfe kommt sie bis glücklich durchkam, ... (S. 221, Z. 26 f.) zur Tür. (S. 38, Z. 6)
- (64) Und einer von den Räubern Ein Räuber hat gemerkt, an sah, **dass** an dem Goldfinger ihrem Ringfinger ist noch ein noch ein Ring steckte, ... (S. 222, Z. 29 f.) schöner Ring. (S. 43, Z. 4 f.)

4.2.4 間接疑問文 (indirekter Fragesatz) (4 例)

- (65) „Ich weiß nicht, wo Euer Haus „Wo ist denn dein Haus?“ (S. ist.“ (S. 219, Z. 19 f.) 23, Z. 2)
- (66) „Könnt Ihr mir nicht sagen,“ Das Mädchen spricht sie an sprach das Mädchen, „**ob** mein und fragt: „Wo ist denn mein Bräutigam hier wohnt?“ (S. Bräutigam?“ (S. 30, Z. 1 f.) 220, Z. 18 f.)
- (67) denn sie sah wohl, **was für ein** (当該の表現なし) Schicksal ihr die Räuber zuge- dacht hatten. (S. 221, Z. 7 f.)
- (68) Da erzählte das Mädchen Dem erzählt die Tochter die seinem Vater alles, **wie** es sich ganze Geschichte. (S. 39, Z. 3 zugetragen hatte. (S. 221, Z. 33 f.) f.)

4.2.5 条件文 (Konditionalsatz) (3例)

- (69) **wenn** sie dich in ihrer Gewalt (当該の表現なし)
haben, ... (S. 220, Z. 24 f.)
- (70) **Wenn** ich nicht Mitleiden mit Ich habe Mitleid mit dir und
dir habe und dich rette, ... (S. rette dich, ... (S. 30, Z. 7)
220, Z. 27 f.)
- (71) **wenn** die Räuber schlafen, Bald schlafen die Räuber. (S.
... (S. 220, Z. 32) 31, Z. 4)

4.2.6 因由文 (Kausalsatz) (2例)

- (72) und **da** der Müller nichts an Der Müller hat an ihm nichts
ihm auszusetzen wusste, ... auszusetzen ... (S. 22, Z. 4 f.)
(S. 219, Z. 12 f.)
- (73) und **weil** er schwer abzuziehen (当該の表現なし)
war, ... (S. 222, Z. 30 f.)

4.2.7 目的文 (Finalsatz) (2例)

- (74) und **damit** du den Weg durch dann findest du zu meinem
den Wald findest, ... (S. 219, Haus." (S. 23, Z. 6 f.)
Z. 24 f.)

- (75) und **damit** es den Weg be- (当該の表現なし)
zeichnen könnte, ... (S. 219, Z.
28 f.)

4.2.8 間接話法 (indirekte Rede) vs. 直接話法 (direkte Rede) (2例)

- (76) so wünschte er, sie wäre ver- ihr Vater denkt: „Kommt ein
sorgt und gut verheiratet: (S. ordentlicher Mann und macht
219, Z. 8 f.) ihr einen Heiratsantrag, wird
er mein Schwiegersohn.“ (S.
22, Z. 2 f.)

- (77) Es suchte Ausreden und mein- Das Mädchen sucht nach
te, es könnte den Weg dahin Ausreden: „Ich weiß den Weg
nicht finden. (S. 219, Z. 21 f.) dorthin nicht!“ (S. 23, Z. 4 f.)

4.2.9 zu 不定詞 (Infinitiv mit zu) (1例)

- (78) so kam ein Freier, der **schien** Nicht lange danach kommt ein
sehr reich **zu** sein, ... (S. 219, Freier. Er ist sogar sehr reich.
Z. 11 f.) (S. 22, Z. 3 f.)

4.3 オリジナルと教科書版との統計的比較

ここで二つの童話に共通する形態論上の特徴に言及しておく。関係文、**dass** 文、時称文、因由文、条件文、比較文、間接疑問文、目的文は副文として一括することが可能である。両者に共通するのは次の事項である：

- ① 副文の書き換え

- ② zu 不定詞の書き換え
- ③ 間接話法から直接話法へ
- ④ 呼びかけ（「プレーメンの音楽隊」のみ）

これを統計的にまとめると以下の通りである：

	①	②	③	④	計
プレーメンの音楽隊	33	3	5	4	45
盗賊の花婿	30	1	2	0	33
計	63	4	7	4	78

この表から、二つのテキストの決定的な相違は副文の有無にあり、これがテキストの分かりやすさに重大な影響を及ぼしていると言える。

5. テキスト言語学的分析

さて、いよいよ上記の形態論上の違いに注目しながら分析を始める。

5.1 Kessel/Reimann (2010)

テキスト言語学では、未だに確固としたテキストの分析方法は存在しない。その中でも具体的、且つ詳細な分析方法を提示しているのが Kessel/Reimann (2010) である。本稿では、この分析法を部分的に採用する。先ずこれを要約して紹介する⁽⁴⁾：

1. テキスト種類 (Textsorte), テキスト機能 (Textfunktion), テ

(4) Kessel/Reimann (2010), S. 220 ff.

テキスト作者のコミュニケーション意図 (die kommunikative Absicht) に関して、最初に評価する。

2. テーマの展開 (Themenentfaltung) へと考察を進める。一番良いのは、指示作用の連鎖 (Referenzketten) やイゾトピーレベル⁽⁵⁾ (Isotopieebene) を突き止めた後で、テキストテーマ (Textthema), ないしはテキストテーマ (Textthemen) を述べることである。というのは、指示作用の連鎖やイゾトピーレベルが、テキストテーマやテーマンについて情報を与えてくれるからである。
3. 以下の要領で、如何にして結束性 (Kohärenz) が成り立っているのかを調査する：

トピック (Topiks) を記述するために

- a) 先行表現 (Bezugsausdrücke; BA) と参照指示表現 (Verweisausdrücke; VA) を突き止める。
- b) 先行表現と参照指示表現を統語的観点から記述する。その際、参照指示表現は語彙的にも文法的にも可能であることに注意する。
- c) BA と VA の間に、指示作用の一致 (Referenzidentität), あるいは不一致 (-verschiedenheit) があるかどうかを突き止め、指示作用の手段 (例えば、指示作用の一致の場合は、語彙素の置き換え：同義性 (Lexemsubstitution: Synonymie) を記述し、場

(5) イゾトピー (Isotopie) とは、語のレベルでの反復で、表現は異なるものの、同じ意味の特徴を持つ語が繰り返されることを言う。例えば、「ヘビースモーカー」「肺癌」「葉巻」「依存者」「喫煙」は「健康を害する」(*gesundheitsschädigend*) に関するイゾトピーである。Vgl. Kessel/Reimann (2010), S. 210. 尚、イゾトピーは元来、化学の術語 (アイソトープ, 同位体) であったが、テキスト中でも同じ意味の表現が繰り返される様子を同位体現象と見做すが故に、テキスト言語学へと転用された。

- 合によっては指示作用の関係（例えば指示作用の統一）を述べる。
- d) 先行表現と参照指示表現の統語的關係を決定する。
 - e) 結合の間隔（Verflechtungsabstand）や結合の方向（Verflechtungsrichtung）を突き止める。

指示作用の連鎖を確かめるために

- a) 同一の指示作用目的語に関係する、テキスト中のすべての語を決める。
- b) トピックを記述するために、先行表現と全ての参照指示表現をその用い方に応じて分類する。
- c) テキストテーマに関して、指示作用の連鎖を突き止めた結果から、どのような結論を導き出せるか？

イゾトピーレベルを決定するために

- a) 超文分析的に（transphrastisch）、多層的に繰り返される、意味論的特徴を突き止める。
- b) イゾトピーレベルの全ての語を列挙する。
- c) それらの語の品詞は？
- d) テキストテーマに関して、そしてテキスト種類に対して、一つ、あるいは幾つかのイゾトピーレベルを突き止めたことから、どのような結論を導き出せるか？
- e) ひょっとすると、さらに別なイゾトピーレベルが見つかるかもしれないので、上記の方法を繰り返してみる。

構造の反復（Strukturrekurrenz）を突き止めるために

テキストの文章中に、構造的に共通している点一例えば、対句のよ

うな文体上のあや等—があるかどうか確かめる。

結合関係 (Konnexion) による結合 (Verflechtung) のために

- a) テキストからすべてのコネクター (Konnektoren) を抜き出す。
 - b) コネクターの場所 (位置) を挙げる。
 - c) コネクターによって、どのように文と文が意味論的に互いに関連しあっているか？
4. 考察の結果から—指示作用形式 (Referenzformen) の方法と数から—テキスト種類, テキスト機能, テキスト製作者のコミュニケーションの意図のそれぞれに関して, 結論を導き出す。
 5. テキストテーマ, ないしはテキストテーマを自分の言葉で表現する。

5.2 Kessel/Reimann (2010) の問題点

この分析方法は、短いテキストを分析することを暗黙裡のうちに前提としている。その証左として、モデル例 (Musteranalyse) として挙げられている新聞記事のテキストはわずか9行である。これは、ドイツでゲルマニスティックを専攻する学生が、卒業・終了する際に受験する国家試験 (Staatsexamen) の現代ドイツ語の言語学的分析 (gegenwartssprachliche Analyse) を強く想定したものである。

従って、本稿のようにあるまとまった分量で、しかも内容的には同一のテキストを分析する際には、その方法を適宜、取捨選択して分析せざるを得ない。さらに、この方法は、上記の1.から順番に分析を進めていく、という方式を採っているが、本稿のようなテキストの違いを分析する場合には、個々のケースに合致した方法を逆に上記から選ぶ、という方法を採用するのが最も現実的である。

以下では、4.3で考察したオリジナルと教科書版との四つの相違点、つまり①副文の書き換え、② zu 不定詞の書き換え、③間接話法から直接話法へ、④呼びかけについて、テキスト言語学的分析を行う。

5.3 副文の書き換え

副文の書き換えは、二つの童話を通して78例中63例(80.8%)が確認された。オリジナルと教科書版との間で、最も異なる箇所である。

Kessel/Reimann (2010) の分析方法には、「副文」に該当するような項目はないが、テーマの展開 (Themenentfaltung) を応用するのが得策であろう。一般に、テーマの展開には次の四つがあるとされるが、明確な基準は存在しない：

- 1) 記述的 (deskriptiv; 例えばニュース)
- 2) 物語的 (narrativ; 例えば日常の物語)
- 3) 解説的 (explikativ; 例えば取扱い説明書)
- 4) 論証的 (argumentativ; 例えば新聞のコメント)

この中で、童話のテーマの展開は明らかに「物語的」である。しかし、オリジナルと教科書版を精査すると、さらに厳密な分析が必要である。なぜなら、オリジナルには童話とは言え63例もの副文が用いられているからである。

統語的観点からすれば、副文とは語順、時制や法 (Modus) の選択、並びに発話内行為 (Illokution) という点に関して、上位にある主文に依存した文である⁽⁶⁾。

(6) Vgl. Bußmann (2008), S. 467.

他方、意味論的観点からすれば、副文は主文との関係を述べる文である。例えば、時称文は主文と副文との間に存在する時間的な関係を、因由文は主文の意味内容に関する原因や理由を、それぞれ説明する。上記で引用した副文は、関係文、*dass* 文、時称文、因由文、条件文、比較文、間接疑問文、目的文の 8 種類に上る。

従って、テーマの展開に関して言えば、オリジナルは「物語的」でありながら「解説的」「論証的」要素を多分に含んだテーマの展開となっている。

これに対し、教科書版では書き換えにより、「解説的」「論証的」要素が消されている。以上の考察から、両者の違いを図で示すと以下の通りである：

	オリジナル	教科書版
テーマの展開	narrativ (+ explikativ) (+ argumentativ)	narrativ (- explikativ) (- argumentativ)

5.4 zu 不定詞の書き換え

zu 不定詞は上記の ③⑨(40)(41)、及び(78)が該当する。(40)の *um...zu* 不定詞「～する為に」以外は、zu 不定詞が以下のように動詞の目的語となっている：

- ③⑨ *dachte* 「考えた」
- ④① *fingen...an* 「始めた」
- (78) *schien* 「見えた」

zu 不定詞に関しても、Kessel/Reimann (2010) の分析法にはこれに対

応した分析法はない。上で考察した「副文」と同様に、統語的観点からすれば、zu 不定詞も上位の動詞に依存している。教科書版には zu 不定詞は全く見られない。zu 不定詞をなくし、文章を単純化することによって、「テーマの展開」がより「物語的」となっていると解釈できるのではなからうか。

従って、テキスト言語学から見れば、副文の書き換えと同様、zu 不定詞の書き換えも「テーマの展開」に影響を及ぼしていると言える。ただし、zu 不定詞は4例(5.1%)と少ないので、その影響も少ないと言えよう。

5.5 間接話法から直接話法へ

間接話法から直接話法への書き換えは、構造の反復(Strukturrekurrenz)に該当する。

同一の法を用いた文章(Modusgleiche Sätze)は、文章に互いに結びつく力がある為、一まとまりと感じられるのに対し、接続法(Konjunktiv)を用いた文章である間接話法の場合、そうは感じられない。なぜなら、接続法が用いられている個所は、サブテキスト(Subtext)に下位区分されるからである⁽¹⁷⁾。

つまり、テキスト言語学からみれば、同じ法、即ち直説法(Indikativ)が使用されている文章では、同じ構造が繰り返されたと見做され、統一感のあるテキストと感じられる。これに対し、接続法が使用されている個所は、「統一を欠いた」と判断される。

要するに、間接話法から直接話法への書き換えによって、接続法が消え、その結果、同じ構造が反復している、と言えよう。

ところで、Zifonun/Hoffmann/Strecker はコンテキスト種類(Kon-

(17) Kessel/Reimann (2010), S. 210.

(18) Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997), S. 1743 ff.

textsorte) という言い方をし、コンテキストを次の四つに分類している⁽¹⁸⁾：

- 直接コンテキスト (Direktheitskontexte)
- 間接コンテキスト (Indirektheitskontexte)
- 事実コンテキスト (Faktizitätskontexte)
- モダリテートコンテキスト (Modalitätskontexte)

直説法はすべてのコンテキスト種類に現れうるが、接続法は「間接コンテキスト」と「モダリテートコンテキスト」にしか現れない。

Zifonun/Hoffmann/Strecker に従えば、間接話法が使用されたのは「間接コンテキスト」ということになる。教科書版では、間接話法から直接話法へと書き換えられているので、「直接コンテキスト」から「間接コンテキスト」へとコンテキスト種類が変化した、とも解釈できる。

5.6 呼びかけ

「呼びかけ」の表現は「ブレーメンの音楽隊」にしか見られない。主として、動物の外見的特徴を象徴的に表現したものである。教科書版では、この「呼びかけ」を完全に省略している。以下に再度引用し、日本語訳を付し⁽¹⁹⁾、誰に対しての呼びかけなのかを検討する。尚、発話者は(45)以外はロバ (der Esel) である。(45)の発話者はおんどり (der Hahn) である。

(42) Packan (S. 161, Z. 12)

(当該の表現なし)

犬に対して：ワン公 (261頁)

(19) 日本語訳は、グリム兄弟 (池田香代子訳) (2008) を参照させて頂いた。

- (43) alter Bartputzer (S. 161, Z. 23 f.) (当該の表現なし)
猫に対して：髭なでのおばあ (262頁)
- (44) du Rotkopf (S. 162, Z. 12) (当該の表現なし)
おんどりに対して：赤いとさかの兄弟 (263頁)
- (45) Grauschimmel (S. 163, Z. 1) (当該の表現なし)
ロバに対して：灰色の兄き (264頁)

呼びかけを分析するには、先行表現 (Bezugsausdrücke; BA) と参照指示表現 (Verweisausdrücke; VA) が好適である。二つの表現が同一の目的語を指す場合、共同指示作用 (Koreferenz) と呼ばれる。この際、最初の自意的な (autosemantisch) 表現が先行表現で、しばしば不定冠詞を伴って現れる。この語以降に現れる、共同指示的な表現が参照指示表現である。この表現は共意的 (synsemantisch) で、しばしば人称代名詞のこともあり得る。先行表現と参照指示表現を二つ合わせてトピック (Topik) と呼ぶ²⁰⁾。

以下では(42)を例にして分析を進める。まず、(42)の前後のテキストを引用する。

Als er (der Esel) ein Weilchen fortgegangen war, fand er **einen Jagdhund**^{BA} auf dem Wege liegen, **der**^{VA} jappte wie einer, der sich müde gelaufen hat. „Nun, was jappst **du**^{VA} so, **Packan**^{VA}?“ fragte der Esel. (S. 161, Z. 8–11)

²⁰⁾ Kessel/Reimann (2010), S. 209.

このテキストの中で、猟犬 (*Jagdhund*) が登場するのは、この個所が最初である。従って、*einen Jagdhund* が先行表現 (BA) となる。これ以降、猟犬を指す語はすべて参照指示表現 (VA) となる：

der (関係代名詞) ; *du* (お前) ; *Packan* (ワン公)

教科書版では、この *Packan* が省略されている。テキスト言語学から見れば、参照指示表現が一つ減少したと言えるが、学生がテキストを理解する上ではあまり影響がないと言える。

6. 結 論

本稿では、グリム童話の二つの物語、「ブレーメンの音楽隊」と「盗賊の花婿」に関して、そのオリジナルと教科書版との形態論的な相違に焦点を当て、テキスト言語学的観点からテキストの「分かりやすさ」を解明すべく考察を進めてきた。

二つのテキストの相違を分析するには、「テーマの展開」「構造の反復」「先行表現」と「参照指示表現」が有効であった。その中でも、「副文の書き換え」と「zu 不定詞」を分析する際に用いた「テーマの展開」が78例中67例 (85.9%) とそれを圧倒しているので、特に重要である。

かくして以上の考察を進めれば、分かりやすいテキストとは、そのテーマの展開が「物語的」で、しかも「解説的」「論証的」要素を極力排除したテキスト (narrativ; - explikativ, - argumentativ) と見えようか。

ドイツ語教授法的観点から言えば、初級を終えた2年生以上の上位年次向けの教材には、このようなテーマの展開となっている教科書を選定したり、執筆したりすることが肝要である。さらに、独作文の指導に際しては、

このようなテーマの展開となる文章を書くよう学生を導くことが望ましい。

本稿では、意味論的観点からの分析、例えばイゾトピーレベルの分析は行っていない。この観点からの考察は次回に譲りたい。

参考文献

- Beaugrande, Robert-Alain de/Dressler, Wolfgang Ulrich (1981): *Einführung in die Textlinguistik*. Tübingen (Niemeyer).
- Benedikt XVI. (2006): *Glaube und Vernunft: die Regensburger Vorlesung*. Kommentiert von Gesine Schwan, Adel Theodor Khoury, Karl Kardinal Lehmann, Freiburg (Herder).
- Brekle, Herbert E.: „Weite der Vernunft“ in der *universitas scientiarum*. In: Dohmen (2007), S. 160–164.
- Brinker, Klaus (2005): *Linguistische Textanalyse. Eine Einführung in Grundbegriffe und Methoden*. 6., überarbeitete und erweiterte Aufl., Berlin (E. Schmidt).
- Bußmann, Hadumod (2008) (Hrsg.): *Lexikon der Sprachwissenschaft*. 4., durchgesehene und bibliographisch ergänzte Aufl., Stuttgart (Kröner).
- Dohmen, Christoph (2007) (Hrsg.): *Die „Regensburger Vorlesung“ Papst Benedikts XVI. im Dialog der Wissenschaften*. Pustet (Regensburg).
- Hausendorf, Heiko/Thim-Mabrey, Christiane (Hrsg.): *Ein Kunstobjekt als Schreibanlass. Die deutsch-tschechische Reise der „Glasarche“ im Spiegel ihrer Besucherbücher*. Regensburg (edition vulpes).
- Kessel, Katja/Reimann, Sandra (2010): *Basiswissen. Deutsche Gegenwartssprache*. 3., überarbeitete und erweiterte Aufl., Tübingen u.a. (A. Francke).
- Rölleke, Heinz (2003) (Hrsg.): *Brüder Grimm. Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand. Mit einem Anhang sämtlicher nicht in allen Auflagen veröffentlichter Märchen*. Stuttgart (Philipp Reclam jun.).
- Thim-Mabrey, Christiane/Greule, Albrecht (2007): *Zitat—Verstehen—Missverstehen. Ein sprachwissenschaftlicher Kommentar zur „Regensburger Vorlesung“*. In: Dohmen (2007), S. 165–186.
- Zifonun, Gisela/Hoffmann, Ludger/Strecker, Bruno (1997): *Grammatik der deutschen Sprache*. 3 Bde, Berlin/New York (de Gruyter).
- 乙政潤 (2005) : 『日独比較表現論序説—パラフレーズ翻訳法のすすめ—』 大学書林
- 川島淳夫 (編集主幹) (1994) : 『ドイツ言語学辞典』 紀伊國屋書店
- グリム兄弟 (池田香代子訳) (2008) : 『完訳 グリム童話集1』 講談社文芸文庫
- 黒沢宏和 (2009) : ドイツ語学は何ができるのか?—ローマ教皇の「レーゲンスブ

ルク講義」を題材として—『琉球大学欧米文化論集』第53号, pp.29-52, 琉球
大学法文学部編

R. de ボウグランド/W. ドレスラー (池上嘉彦 他訳) (1984):『テキスト言語学
入門』紀伊國屋書店

Wundt, Stefan/本橋右京 (2007) 編著:『グリム童話で学ぶドイツ語 Part II』
郁文堂